

環境都市常任委員会所管事務調査報告書

1 日 程 令和8年5月12日（火）～14日（木）

2 調査地及び調査項目

- (1) 大阪府茨木市
茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」について
- (2) 大阪府吹田市
江坂公園（Park-PFI）について
- (3) 兵庫県姫路市
ウォーカブル推進計画について

3 出席者

委 員：横山 むらさき、桑原 昌之、吉村 慶一、大塚 毅、
八尋 伸二、今井 実、風間 正子
執行部：猪野 好春
議会局：布施 縁、井上 裕大

大阪府茨木市（５月１２日）

１ 調査項目

茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」について

ア 事業概要

おにクルは、令和５年に開館した文化・子育て複合施設であり、「育ち・学び・交流・創造が循環する拠点」をコンセプトとして整備されたものであり、施設内には、図書館機能、子育て支援機能、多目的ホール、市民活動スペース等が集約されており、子どもから高齢者まで幅広い世代が利用できる構成となっている。

また、来館者の滞在や回遊を促進することで、中心市街地のにぎわい創出にも寄与する施設として位置付けられている。

主な特徴として次の５点が上げられる。

１、複合機能による相乗効果の創出。図書館、子育て支援、文化施設、市民活動機能を一体的に配置することで、利用者の目的を限定しない滞在型施設として運営されている。これにより、施設内での偶発的な交流や新たな活動の創出が図られている。

２、子育て支援機能の充実。屋内遊び場や一時預かり、相談機能を備え、親子が安心して長時間滞在できる環境が整備されている。単なる支援機能にとどまらず、文化施設との融合により、子育て世代の多様なニーズに対応している点が特徴となっている。

３、交流型図書館の展開。従来の静的な図書館機能に加え、交流やイベントを重視した運営が行われており、学びと交流の拠点としての役割を果たしている。

４、市民主体の活動促進。多目的スペースやスタジオ等を活用し、市民が主体となった企画・運営が可能な環境を整備している。これにより、市民活動の活性化と施設の継続的なにぎわい創出が図られている。

５、中心市街地活性化への寄与。駅前立地を生かし、来館者の増加と周辺エリアへの波及効果を生み出しており、まちづくりの核となる施設として機能している。

市民とともにまず実行すること、市民にも自分事として考えてもらうことを非常に大事にしている。

イ 主な質疑

Q：延べ床面積の決め方や断念せざるを得なかったところはどこか。

A：延べ床面積は、2万平方メートル弱であり、各機能については基本計画の中で決めている。その中で、必要なものの順位をつけていった。病院が欲しいとの意見もあったが、それは面積や機能の面から断念したなど、細かなところで実現できないことは生じた。

Q：設計者との調整はどうか。

A：市でコンセプトをまず提示し、提案をもらった中で市民との意見交換を事業者も含めて対面で行っていった。

Q：おにクルを実験場と表現しているが具体例はなにか。

A：いばらば広場のようにとりあえずやってみることを大事にしている。提案に対し、どうやったら出来るかを市民ととことん考えて実践してみることを大切にしている。

Q：会議において色々なことを企画している中で最も大切にしていることはなにか。

A：提案があったときにまずは、肯定してからどうやったら出来るかを考えることを会議のルールとして決めている。

Q：市民との合意形成はどうか。

A：第三者のファシリテーターを交えて話し合っていた。また、外から要望のみを言う人は基本的に話し合わず、一緒に実現していこうとする人としっかり話し合っていた。

Q：総工費の中の基金が44億円と話されていたが、おにクルを作るための基金か。

A：おにクルのためではなく、今後の文化施設のためにかなり前から積み立てていた。

Q：内部のデザインや設計の発注方法はどうか。

A：各機能ごとに細分化して、直営か指定管理にするかを細かく分けて考えていった。コストのみではなく機能ごとに丁寧に検討していった成果が今出ていると考えている。

Q：空間と機能のバランスで気をつけたことは。

A：壁を少なく薄くしてもらい、機能に対して空間をうまく使い開放的な施設を設計している。吹き抜けなどを活用し、開放感を非常に感じる施設となっている。

大阪府吹田市（５月１３日）

１ 調査項目

江坂公園（Park-PFI）について

ア 事業概要

江坂公園は、昭和44年に開設された面積約2.3ヘクタールの近隣公園であり、令和５年にリニューアルオープンした都市型公園で、駅前徒歩圏という高い利便性を有し、都市の中心にありながら緑や水景を感じられる都市のオアシスとして、周辺住民のみならずオフィスワーカーにも利用されている。

リニューアルにあたっては、官民連携手法（Park-PFI）を活用し、カフェやレストラン等の収益施設を導入するとともに、公園機能の高度化が図られている。

主な取組内容として次の５点が上げられる。

１、官民連携（Park-PFI）による再整備。民間事業者の資金やノウハウを活用し、公園の再整備と管理運営を一体的に実施している。収益施設（飲食店等）の設置により、公園の魅力向上と持続可能な運営を両立している点が特徴となっている。

２、都市型公園としての機能強化。カフェやレストランの整備により、単なる「通過・利用の場」から「滞在・交流の場」へと転換が図られている。また、水景施設（カスケード）や緑地空間により、都市部における憩いの場としての機能が強化されている。

３、子ども・子育て世代への対応。インクルーシブデザインの大型遊具を導入し、障がいの有無に関わらず遊べる環境を整備している。また、複数の遊び場（ちびっこ広場・わんぱく広場）により、多様な年齢層に対応している。

４、図書館との一体的整備。公園内に江坂図書館を併設し、読書・学習と公園利用を一体的に行える環境を整備している。公園と図書館の回遊性を高めることで、滞在時間の延伸が図られている。

５、指定管理者制度による運営。令和4年より指定管理者制度を導入し、民間主体による柔軟かつ効率的な管理運営を実施している。長期の管理期間により、安定的な運営と継続的な価値向上が図られている。

イ 主な質疑

Q：ワーキンググループで色々な意見が出ると思うが、参加しているのはどのような人か。

A：自治会連合会、公園ボランティアなど10人くらいで行った。

市民の公募で現在は協議をしている。年配の方が多いが、様々な年代がいる。

Q：高齢化による公園の管理や子どもがいないことによる影響はなにか。

A：休むのみの公園やトレーニング器具を入れた公園などそれぞれの公園ごとに特色を入れているが、課題はなかなか解決できないことだと考えている。

Q：令和4年にドッグランの実証実験を行なっているが、経緯などが分かれば教えてほしい。

A：市民からの要望が多いため社会実験の1つとして行なったが、近隣からの騒音問題など課題が非常に大きいと感じた。

Q：江坂公園と桃山公園を2つ運営していく上で課題はなにか。

A：地域性が違うため、市民の要望が全然違い、それぞれの特色を把握したり調整することに苦労した。

ビル街にあるのか自然環境にあるのかで市民の意識が全然違った。

Q：江坂公園に図書館機能があると思うが、本離れの中で書籍の管理など苦労していることは。

A：管理は特に苦労していないが、年間40万人が訪れている中で、本を実際に借りている人は30万人程度のため、借りてもらえるための工夫を現在考えている。

Q：官民連携（Park-PFI）していく中で、市の方で事業者に細かな指示をしてから発注したのか。

A：事業者には細かな指示はしておらず、目指すべき姿を提示したざっくりした要件で募集した。そのため市としてカフェは1つで考えていたが、事業者からの提案で2つになっているなど当初考えていたことから変更した点も複数ある。

兵庫県姫路市（５月１４日）

１ 調査項目

ウォーカブル推進計画について

ア 事業概要

姫路市が策定した「姫路市ウォーカブル推進計画」は、中心市街地において歩行者中心の居心地が良く歩きたくなるまちなかの実現を目的として、令和３年３月に策定されたものであり、本計画は、従来の自動車中心の都市空間から、人が主役となる都市空間への転換を図り、公共空間の利活用やリノベーションまちづくりを通じて、にぎわいと回遊性の向上、さらには都市の魅力向上を目指すものとなっている。

道路空間の再配分にとどまらず、社会実験を通じた実証、公共空間利活用の制度整備、官民連携による運営体制を一体的に構築した実装型まちづくりであり、滞在と交流を生む都市空間への転換を実現している点に特徴がある。

細かく分けると、滞在空間の設置を行っている大手前通りの再編や道路空間の柔軟な利活用を促進するための道路占用許可の弾力的運用、オープンカフェの常設化、民間主催イベント許可の円滑化などを積極的に行っている。

本取組は、社会実験を通じた実証的アプローチ、公共空間利活用の制度整備、官民連携による持続的運営が高く評価され、国土交通省のまちづくりアワードにおいて国土交通大臣賞を受賞している。

イ 主な質疑

Ｑ：市民などとの合意形成はどうか。

Ａ：計画の段階では合意形成はせず、策定してから行うとしていた。

Ｑ：社会実験でもらった意見はどうか。

Ａ：交通規制に対する不便だという苦情は多数寄せられた。しかし、歩行空間があることによってにぎわいにつながるとの意見も多くあった。

Ｑ：現在抱えている課題はなにか。

Ａ：個々の事業にそれぞれ課題があるため、エリアとして考えていく必要性を感じている。

Ｑ：イベントを行う際の警察の許可はどうか。

A：道路を使う時に警察との調整を行なっている。事業者が警察と調整する際は、市が一緒に行ってハードルを下げています。

Q：道路使用に対する料金負担はどうか。

A：市が出さずに主催者が費用を負担することになっている。

Q：観光客が多いと思うが、市民だけでなくイベントに観光客も参加しているという印象か。それとも市民が占めているのか。

A：市民や近隣の人が参加している印象。観光客向けにやっているという感覚を持っていない。

Q：社会実験について、最初は行政がやっていると思うが、今は事業者がやっているのか。

A：警察との協議等の手続きの部分はサポートしているが、基本的には事業者が主体的にやっている。

Q：社会実験をやる中で多様な主体とやっているという説明があったが、学生たちとの連携についてどうか。

A：高専の方が中心となって初期の調整段階から一緒に行った。大学のゼミの方にも参加してもらった実際がある。先生と事業者の接点があって市が最初から入らなかったパターンもある。

Q：商店街のにぎわいはどうか。

A：お城に行く観光客と地元民で非常ににぎわっていて、閉まっている店はほぼないと考える。やはりお城の影響が大きい。

Q：計画の中でのKPIのような目標はどうか。

A：特に定めていない。大きな部分での計画となっているため、具体的な目標を定めて作っていない。

Q：外国人の方が非常に多いと思うが、それは見込み通りか。

A：時間帯によってかなり変わってくると思うが、日常を目指しているため観光客向けの施策はあまり打ち出していない。市民の方が楽しんでもらえるコンテンツを考えている。